

学校文化を創り出す

何年も会っていなくても、「あの人は〇〇さんだ…」とわかるのは、その人の顔を見なくても、たとえばその人の声であったり、歩き方であったり、何気ないしぐさであったりします。いわば、その人が身に纏っている‘空気’と言ってよいかもしれません。こうした空気は長い時間を経たとしてもあまり変わらないと感じています。

私は、学校にもそれぞれの学校の‘空気’のようなものがあると思っています。

初めて訪れる学校でも、正門から入り、昇降口で靴を履き替え、階段を上がって上の階に行き、いくつかの教室や職員室の前を通り、廊下の掲示物や作品を見ながら、校長室にたどり着くころには、何となくその学校の雰囲気が伝わってくるのです。

明るく活気にあふれた雰囲気、整然と落ち着いた雰囲気、何か重苦しい雰囲気、雑然として気が休まらない雰囲気など…直感的に身体感覚で感じ取るものがあります。

それは教室も同じです。校長時代、一日に何度も授業中の教室を巡りましたが、一步教室に入って授業や子どもたちの様子を見てみると、その教室空間が纏っている空気を感じます。

清潔感にあふれた明るい教室、子どもが安心して心と身体を開いている教室、自由に意見が言い合える雰囲気を感じる教室がある一方、何か硬く閉じた雰囲気を感じることもありました。

こうした雰囲気は日によっても異なることもありました。良くも悪くも子どもの変化のサインを感じることも少なからずあったのです。

以前の職場でお世話になった PTA 会長さんは、区内でスポーツ店を営んでおり、仕事柄区内の多くの学校の職員室を訪れる機会がありました。その会長さんがよく言っていたのは、「学校によって職員室の雰囲気がかなり違いますね…。何かよそよそしい雰囲気の学校もあれば、いつ行っても明るい雰囲気の学校もあります…。」ということです。気がつかないうちにいろいろな人に学校が的確に評価されていることを感じました。

教室や職員室はその学校の文化を映し出す鏡だと思っています。それぞれが安心して過ごせる居場所になっていること、自由に自分の気持ちや意見を言い合えること、そして自由な中にも規律が保たれていること…そんな場所であることが求められているのです。

こうした雰囲気は誰か一部の人がつくるものではなく、子どもや教職員が協働して創り上げていくべきものだと思います。「どんな学校にしたいのか？」という願いや思いをしっかりと共有して、一人一人が組織文化を担う当事者であることを意識していきたいと考えています。